

名前のない子

エッセー

気がつくとき女の子は、一人ぼっちでした。

太陽に照らされた明るい教室は、みんなの笑い声であふれていました。
みんなが笑っても、女の子は笑いません。朝からずっと積み木でお城を作っています。

りっぱな門を作りましょう。
高い塔を建てましょう。
広いお部屋を用意して、
かわいい家具を置きましょう。
すてきなお城ができました。
木の人形にあげましょう。
先生にも見せてあげましょう。

女の子は、立ち上がりました。
誰もいない教室は、暗く、静かです。
女の子は、窓から庭を眺めました。

春を迎えた幼稚園は、花でいっぱいです。赤、白、黄色、たくさんのチューリップが咲いています。門の外には、山も見えます。けれど、先生はいません。

女の子は、積み木の城の前で、先生を待つことにしました。すると教室の扉が開いて、先生と男の子が入ってきました。

先生は、怒っていました。

「さあ、早く行きましょう」

女の子は、動きません。
男の子が笑いました。

「のろま」

男の子が、積み木の城を見つけました。

「わたしのお城よ」

「バーカ、お前のじゃない。みんなのだ」

男の子は、お城を壊してしまいました。

「片づけたら、いらっしゃい」

先生と男の子は、去っていきました。

女の子は、また一人ぼっちになりました。隣には、壊れたお城があるだけです。

女の子は、散らばった積み木を眺めました。すると声が聞こえました。

「痛いよ。暗いよ」

女の子は、積み木を持ちあげました。木の人形が姿を現しました。

「あなたがしゃべったの？」

女の子は、木の人形に聞きました。木の人形は、黙ったままです。

「あなたが話すわけない。だって、目も鼻も口もないもの。手も足だってない。なんにもない子ね」

木の人形には、顔がありません。丸い頭に牛乳びんのような体がついているだけです。のっぺらぼうでも、女の子には泣き顔に見えました。

「大丈夫、もう一度作ってあげる」

女の子は、木の人形をポケットにしまいました。そして、積み木の城を作り始めました。

「早くいらっしゃい」

声に驚いた女の子は、積み木を落としてしまいました。

「どうしたの？」

足音が、教室に近づいてきます。

女の子は、一歩ずつ後へ下がりました。とうとう窓際まで来てしまいました。

窓の外は、風が吹いています。チューリップが揺れています。

女の子は、窓を開けました。すると教室に風が起こりました。窓ガラスが、ガタガタと震えました。

「先生、さようなら」

女の子は、窓から庭へ飛び出しました。

女の子は、走りました。庭を抜け、門を越え、山に飛び込みました。坂道を、走って、走って、どこから来たのか分からなくなりました。

山には、背の高い木が並んでいます。茂った葉が、太陽を隠しています。誰もいない教室よりもずっと暗く、静かです。

女の子は、耳をすませました。けれど、何にも聞こえません。ただ、女の子の弾む息だけが、こだましています。

女の子は、ポケットから木の人形を出しました。そして、土の上に置きました。

「今から、あなたのお家を作ってあげる」

女の子は、枝や小石を探しました。すると声が聞こえました。

「やっと話せるね」

女の子が振り返ると、男の人が立っていました。男の人は、りっぱな服を着ていました。会社に行く時のお父さんのようでした。けれど、その瞳は、固く閉ざされていました。

「僕が分からないの？」

男の人が、女の子に手を伸ばしました。

「触ってごらん。僕が誰か分かるから」

女の子は、そっとなでました。男の人の手は固く、すべすべにみがかれていました。

「まるで木の人形のようなね」

男の人は、ニッコリ笑いました。

「僕は、この山で生まれた。今は、切り刻まれて、小さな欠片になってしまったけれど、君よりずっと長く生きている」

「どうして、欠片になったの？」

男の人は、静かに話し始めました。

百年前、この山で生まれたこと。
人間が来て、切り倒されたこと。
皮をはがれて、柱にされたこと。
長い間、家の真ん中で重さに耐えたこと。
家が壊され、柱が抜かれたこと。
切り刻まれて、積み木になったこと。
おもちゃとして、また迎えられたこと。
子どもたちに大切にされたこと。

「大切なら、どうして幼稚園に来たの？」

男の人は、悲しげに語りました。

「子どもたちは、大人に変わってしまった。誰も僕で遊ばなくなった」
「いらなくなって、幼稚園に来たの？」

男の人は、寂しげに語りました。

「もう長い間、僕は押し入れに押し込められたままだった。だから嬉しかった。久しぶりに明るい場所にきて、子どもたちに会えて。だけど、みんな去っていく。誰も僕を覚えてない。僕を迎えに来ることはない」

女の子は、怒りました。

「わたしは迎えなんていない。いないのに、いつも先生が探しに来るの。それでじゃまをするの。さっきだって、あなたの家を壊した。壊したくせに怒るのよ。早くっていうの。でも、何を早くするのかしら？」

女の子は、枝や小石を探し始めました。

男の人は、手探りで女の子を探しました。しかし、まぶたが閉じています。木の根につまず

いて、転んでしまいました。

女の子は、男の人を立てさせてあげました。

「目を開ければいいのに」

「僕に名前をつけて。名前があれば、消えかけた命がよみがえる。きっと目も開くはず」

「いいわ。素敵な名前をつけてあげる」

女の子は、考えました。けれど、なかなか木の人形に似合う名前が浮かびません。

男の人は、立ったまま待ち続けました。

「嬉しいな。君は、どんな姿をしているのだろう。早く見たいな」

「目を開けたら、わたしを見るの？」

女の子は、声を上げて泣き出しました。

「急にどうしたの？」

「あなたなんて知らない。もう帰る」

女の子は、走り出しました。走って、走って、転びました。すると誰かが、女の子を抱き起こしました。先生でした。

先生は、とても悲しい顔をしていました。

「さあ、早く帰りましょう」

女の子は、先生と山を出ました。

山から帰った女の子は、何もしなくなりました。

女の子には、相変わらず先生の話が分かりませんでした。女の子に出来たのは、隣の子の真似をすることだけでした。しかし、真似をするうちに、先生の話が分かるようになりました。「早く」と叱られなくなりました。

けれど女の子は、二度と一人で遊ぼうとしませんでした。

女の子は、一人になると窓際に立ち、ぼんやり山を眺めました。そして、窓ガラスに耳を当て、人形の声を探しました。しかし、聞こえるのは風の音だけです。

それから女の子は、大人になり、お母さんになりました。

お母さんは、娘の手を引き、幼稚園にきました。

娘は、お母さんの背中に隠れました。けれど、先生に名前を呼ばれると、門の内側へ入って行きました。

お母さんは、一人で家に帰りました。

それから毎日、娘を送るたびに、懐かしい山を見ました。山は、昔のままでした。

ある秋の日、お母さんが山の前を通ると、強い風が吹きました。風は、木々を揺らし、ゴウゴウと泣き声のような音をたてました。

「わたしを呼んでいるの？」

お母さんは、山に入りました。

大人の目で見ると山は、明るく、開けていました。お母さんは、散歩を楽しみました。

「待っていたよ」

振り返ると、男の人が立っていました。

男の人は、年をとっていませんでした。まぶたも閉じたままです。ただ服だけが、土で汚れて、すっかり古くなっていました。

お母さんになった女の子は、男の人と変わらない年になりました。手も足も、すっかり大きくなりました。けれど黒い瞳の奥には、子どもの姿が隠れていました。

「わたしが分かるの？」

「僕を迎えに来てくれたんだね」

男の人は、お母さんに手を伸ばしました。

お母さんは、逃げました。

お母さんをつかみ損ねた男の人は、土の上に倒れました。

「ごめん、大丈夫？」

お母さんは、男の人を抱き起こしました。

「僕が嫌いなの？」

「好きよ。でも」

お母さんは、男の人を抱き締めました。

「どうして名前を呼ばなかったのか、ずっと考えてきた」

お母さんは、男の人の顔を見ました。

「あなたの目が開いたら、わたしを見る。そして、いつかわたしを嫌いになる」

「ずっと好きだよ。好きなのに」

お母さんは、男の人のまぶたに触れました。

「好きかもしれない。今のあなたには、わたししかいないから。でも、やっぱり名前は呼べない。わたしにも名前なんてないもの。昔は子どもで、今はお母さんと呼ばれている。わたしも、あなたと同じよ。木の人形さん」

「僕の名前は木の人形」

言葉にすると、男の人は目を開けました。

お母さんは、走りました。けれど、男の人の目は、お母さんを見ている。とうとう捕まります。そして、男の人とお母さんは、お互いの姿を見ます。

「僕は君を見た。さあ、一緒に帰ろう」

男の人は、姿を消しました。

お母さんが足元をのぞくと、土の中から木の人形が顔を出していました。

お母さんは、木の人形を掘り起し、ポケットにしまいました。そして、娘の元へ急ぎました。

山を出ると、娘が手を振っていました。

お母さんは、娘に木の人形を見せました。

「汚い人形。拾ったの？」

「昔、失くした人形よ。汚くても、わたしには大切なもの。名前をつけてあげましょう」

「いいよ。なんて名前にする？」

「お母さんに決めさせて。この子の名前を、わたしはずっと考えてきたのだから」

お母さんは、娘と木の人形を連れて、歩き出しました。

あとがき

この物語は、「児童文学の書き方」（横山充男・ポプラ社）を手本に書きました。

説明文と描写文の違いなど、いろいろ勉強になりました。

わたしは、主人公の気持ちではなく、出来事を説明しようとしてしまう。今のままではいけないことは分かるけど、どうすればいいのかわからない。そんな時、この本に出会いました。

書いていて、わたしは自分の感情を無視してきたから、感情ではなく、事実を追ってしまうと気づきました。

わたしは、何を言っているのか、なかなか理解できなかった。どうしていいのかも分からず、でも「早く」と急かされる。家でも、学校でも、人がいる限り落ち着くことはできなかった。一人になると、自分に帰ることができた。

学校では、友達を真似して、なんとかやり過ごしていた。そんなことを繰り返しているうちに、慣れて、分かるようになった。そして、ゲームをクリアするように、期待通りにできることを求めた。

ところが、休まなければ体力が持たなくなってしまった。もう期待に応えることはできない。ゲームを続ける限り、わたしはわたしを否定するしかない。

もし、自分の気持ちを抑えて、周囲の期待に応えることを選ばなかったら、わたしは何を望んだらろう？

たぶん、わたしは自分が作ったブロックの家を見てほしかっただけなのだと思う。でも、わたしには意味があるけど、母親には意味がなかった。同じ気持ちになれないと気づいてしまった。だから、誰にも、何も、求めなくなった。

それでもきっと、わたしは誰かと分かりあいたかったんでしょう。この物語を書きながら、そんなことを考えました。